



Title	パチプロ・バイク修次郎の「パチプロ嫌い」に関する考察
Author(s)	松崎, かさね
Citation	臨床哲学ニュースレター. 2025, 7, p. 168-175
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/100171">https://doi.org/10.18910/100171</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

**特集3 第13回臨床哲学フォーラム（シリーズ：規範の外の生と知恵）**  
テーマ：パチンコ・パチプロの哲学

## パチプロ・バイク修次郎の「パチプロ嫌い」に関する考察

松崎かさね

### I はじめに

#### 1 パチプロ調査での引っかかり

大学院の修士課程でパチプロの研究をしていた際、とても気になることがあった<sup>1</sup>。私は当時、パチプロのA、B、Cの3名に調査を行っていた。このうち、Aはもともとの知り合いであり、BはAのプロ仲間という関係であったが、Cだけは私があるパチンコ店にいた時に話したことがきっかけでたまたま知り合った元パチプロであった。

3人のうち、AとBの考えは一致していた。プレーで最も重要なのはその日の結果よりも「期待値を積み上げる」プロセスを踏むこと、つまり、理論値である期待値<sup>2</sup>が高いパチンコ台でできるだけ多くプレーすることであった。それは確率論の大数の法則に則った方法であり、短期的には負けることもあるが、長期的に見れば概ね収支がプラスになっていく一種の自然の摂理を利用したものである。大当たりが内部のシステムで確率的に決められている以上、このやり方に異論を挟む余地はないように思われた。しかし、Cの考えは違っていた。彼は私に次のように話した。「そのAさんは、大したプロジェクトじゃないと思う。期待値を積み上げれば結果はどうでも良いなんて、そんなわけがない。そう言って結局稼げなくなってプロを辞めていった人を、俺はたくさん知ってるよ？ 結果が得られなければ、期待値は結局、崩れ落ちるんだよ。大事なのは結果、それはどんな仕事だって同じでしょう？」

むろん、そのようなCの考え方を聞いたAは、Cのことを「完全に（店の）カモだと思う」と言ってプロと認めようとはしなかった。目先の結果ばかりを気にしていては、継続的に勝ち続けることは難しいからである。しかし興味深いのは、期待値を無視して打っているように聞こえるCのプレーの仕方も、よくよく実際の行動などを知っていくと結局は他のパチプロたちのように期待値を積み上げているのと同じだったことである。私はそれを何度もCに確認したのだが、結局Cが上記の自分の考えを修正することはなかった。その時に私は思ったのである。Cは「期待値を積み上げる」ことの意味がわからないのではなく、実践できないのでもなく、その考え方を受け入れられない、あるいは受け入れたくない、つまり「嫌い」なのだと。AとCの両者は、「期待

<sup>1</sup> 本論は、2024年6月22日に開催された第13回臨床哲学フォーラム「パチンコ・パチプロの哲学」で発表した内容をもとに執筆したものである。

<sup>2</sup> 一回の試行で得られる値の平均値のこと。パチプロはプレーで使用（投入）する玉やコインの分を加味して算出し、この値がプラスになるかどうかを非常に重視している。

値を積み上げる」プロセスを重複するか、もしくは結果を絶対的なものとするかで激しく対立していた。私はこの調査で、Cがアルコール依存症で通院していた過去を持ち、さらに、かつては複数の消費者金融からお金を借りるほどパチンコにのめり込んでいたこと、そして彼が持つ独特の熱っぽい雰囲気がとても気になっていた。

この独特的な雰囲気は、意外にも、私がその後大学で看護教員になってからも何度もぶり返してくることとなった。というのも、私の専門の1つである人類学の考え方がどうも周りの人たちの「熱っぽさ」を触発してしまうことがあるようだからである。これについて少し説明したい。

## 2 看護での「再会」

私は看護師として数年勤務してから看護学の修士号を取り、さらに社会人類学の修士号を取得して大学の看護教員になるという珍しい経験を持っている。そのためか、私は周りの看護教員らとは少し教育や研究に対するスタンスが異なっていると感じることがある。それもそのはず、看護は実践学であり、人類学は一種の哲学であるから当たり前ではある。このことはおそらく多くの人がご存じのはずである。

さて問題は、人類学という異なるものが看護の中に入った時に、どんな「化学反応」が起こるかである。これはおそらく知らない人が多いと思う。なぜなら、たとえ人文系の研究者が看護学部の所属になったからと言って、決して看護教員になるわけではなく、したがって完全に「中に入った」ことにはならないからである。所属が同じ学部であっても、そこには専門の違いという心理的線引きが看護教員とそうでない教員の間でなされるものである。

では人文科学をする人間が看護教員の「一員」になるとどういうことになるのか。これはあくまでも私の実体験であり、全く一般化できない話かもしれないが・・・端的に言って、周りからの受け入れはあまり良くない。最初こそ珍しがられて興味を持つてもらえるものの、人文科学のスタンスが露わになるにつれて、じわじわと相手側にネガティブな感情が育ってきてしまうところがあるようである。私自身は人文科学の考え方は看護においても大事だと思うのだが、それを理解してもらえる人は寂しいことに、いないに等しい気すらしている。そのような日々の中で、私は周囲の人たちにかつて店で出会った元パチプロCと同じ「熱っぽさ」をしばしば認めるのであった。それは実に不思議な感覚であった。今回のフォーラムで発表させていただいたテーマは、こうしたこれまでの経験における悩みや疑問や発見が背景になっていたと思う。今回のフォーラムの話を小西先生からいただいた際、私は「パチプロが嫌いな人について発表したい」とその場で即答したのであった。

## II バイク修次郎の「パチプロ嫌い」

### 1 人物紹介

上記の「パチプロのことが嫌いな人」として取り上げたのが、今回の発表の主役、『パチンコ必勝ガイド』のライター兼パチプロのバイク修次郎氏（以下、バイクさん）で

ある。彼とは、フォーラムのお話をいただく半年ほど前にパチンコ専門雑誌の関係者のご紹介で知り合った。パチプロに興味があって調査をしていると話す私に、バイクさんは快く調査協力を引き受けてくださった（そして、私の印象では、彼のそのモチベーションは今でもずっと変わらないと思う）。ところが、しばらくバイクさんと話したり、YouTubeチャンネルの動画を拝見させてもらう中で、私は（パチプロであるはずの）彼の、パチプロに対する独特の「距離感」がだんだんと無視できなくなってきた。たとえば『パチプロ出禁座談会』という動画では、次のような司会者とのやりとりが見られた（以下、司会者のヒロシ・ヤング氏は「司」、バイクさんは「バ」）。

司：俺はバイクには一言言いたいことがある。「僕、パチプロじゃない」とかいつも言うじゃないですか。なのに、パチプロのことしかしてないよね？

バ：自分ね、パチプロだとは思ってないんですよ。・・パチンコ好きおじさん。

（周囲からの笑い声）

司：パチンコ好きおじさんは、勝ったり負けたりして、大体負けの方がちょっとビュンって出てるから。それがパチンコ好きなおじさんなんですよ。

バ：あ、結構勝ってます。

（再び周囲からの笑い声）<sup>3</sup>

ここにあるように、パチプロの調査を引き受けてくださったバイクさんは実は、パチプロであることを拒否しているパチプロ、という少々ややこしい人だったのである。私は彼のことを知るにつれてその様子に少々戸惑いながらも、やはり興味を持たずにはいられなかった。というのも、先に挙げたパチプロCが、調査者の私に対してはパチプロの看板を一応は掲げつつも、その内実はどこか受け入れられない部分を持っていたのと同じ構図があると見たためである。そこで、今回の発表テーマは、「なぜ彼は自身をパチプロと認めたくないのか？」とさせていただいた。

ここで、今回の主人公であるバイクさんの生い立ちを簡単にまとめておきたい。<sup>4</sup>

大阪生まれ。子どもの頃は空手を習っていた。父親は板前をする厳しい人であり、かつ元ラガーマンであったため、けんかになると元ラガーマン vs 空手家の、なかなかの激しさであったという。高校卒業後、専門学校で車の整備士の資格を取ったバイクさんは、企業の内定を得た。企業への就職は親の望みであったため、それを叶えることにはなったのだが、一方で、彼には別の夢があった。それは、バイクのプロレーサーになることであった。彼はその夢をあきらめられず、結局内定した企業への就職はしなかったという。父親の失望をかった彼は、以降、友人の家を転々としながら夢を追う生活になったという。

と、その最中に彼はバイクで事故を起こしてしまう。片足を負傷し、長期間の入院

<sup>3</sup> 「パチプロ出禁座談会【前編】」<https://www.youtube.com/watch?v=fAXdm7IJApS>

<sup>4</sup> 生い立ちは「【街頭インタビュー】あなたのパチ人生、教えて下さい～バイク修次郎編～」<https://www.youtube.com/watch?v=SDARMvyMfEE>での本人による語りをまとめた。

が必要になった。これが一つの転機であった—幸いなことに、仕事に就いていたため入院や手術の費用に対する補償や保険金が下りた。ところが彼は、このお金をパチンコに使うようになったのだという（入院しながら！）。

退院後もパチンコにお金をつぎ込む日々は続いた。給料を全てパチンコに使い、家のものを売ったりしてお金を捻出した。当時の彼の状態はまさに依存症であったという。そのような生活を続けていたある日、いよいよこのままでは人生が終わると思った彼は、パチンコ専門誌で勝ち方を真剣に勉強するようになったという。そして、ある時からパチンコで勝てるようになり、勝ち額を伸ばしていった。こうした経緯を経て、2000年からパチプロとしてパチンコ一本の生活をはじめ、その3年後には『パチンコ必勝ガイド』のライターとなって今に至る。

ここまで経過にあるように、バイクさんが前述したパチプロCと同じく、依存症の時期を経てパチプロになった人である点は少し注目しておきたいと思う。以下では、そのようなバイクさんのパチプロに対する考え方を紐解く。

## 2 バイクさんによるプロの定義

傍から見れば立派なパチプロであるバイクさんだが、彼のパチプロに対する考えはなかなか複雑であった。これを示すために、2024年2月に投稿されたYouTube動画『2/22バイク岡田ルドルフのガチパチ生配信』を取り上げたい。この動画はもともと生配信であり、視聴者からのメッセージに受け答えしながら和やかに配信が進んでいた。その中である時、視聴者から「パチプロの定義って何ですか？ 自分でプロって言つたらプロですか？」との質問が投げられた。これに対してバイクさんは次のように答えた。

そう、俺ね、パチプロパチプロって言つてるけど、自分ではパチプロって絶対言いたくなくて。なんかカッコ悪いじゃん、ぶっちゃけ。俺はね、パチプロってのは・・プロってさ、その道を極めた人で、誰かに幸せを与えてる人だと思うの。人に対してね。パチプロって誰にも幸せを与えてないわけよ。だから俺の中ではプロじゃない。で、パチプロって自分から言う人ってプロじゃないと思う。正直あんまり。表に出てる人は、便宜上パチプロっていうことも皆さんあるけど・・パチプロって言葉が俺あんまり好きじゃない。なんか違う言葉ほしいなって思うから。で、俺はもう、今度のセミナーから、自分のことは勝率アップアドバイザーって言いますから。パチプロと呼ばないでください。<sup>5</sup>

ここからバイクさんの話を理解しようとすると、はたして彼がパチプロに対して肯定的なのか批判的なのか、混乱してしまうのはおそらく私だけではないだろう。ここは少し丁寧に読み取っていくこととしたい。

---

<sup>5</sup> 「2/22 バイク岡田ルドルフのガチパチ生配信」

[https://www.youtube.com/watch?v=D\\_5WdrN3-Q4&t=1773s](https://www.youtube.com/watch?v=D_5WdrN3-Q4&t=1773s)

まずバイクさんは視聴者からの質問を受けて、「自分でパチプロって絶対言いたくない」「なんかカッコ悪い」と強めの表現で自身をパチプロと呼ぶことが嫌だと話す。では、なぜパチプロと名乗ることは彼にとって「カッコ悪い」ことなのか。これを説明するために示されたのが、2つのプロの定義——「その道を極めた人」、そして「誰かに幸せを与えている人」である。

一つ目の定義については、プロの条件としてわりと一般的に想像できるものだと言える。プロと言えば、やはりそれなりの実力を有し、その道に長けていることが必要であろう。では、もう一つの方はどうか。「誰かに幸せを与えている人」。これはおそらく一般的にはプロの絶対条件ではないと思う。厳密にいえば、結果的にその人がんばっている姿が他の誰かに感動を与えていることはあるかもしれないが、それは必須のものではなく、まして直接何かを他人に与える必要があるというのではありません。そう考えると、この2つ目の定義はバイクさんが独自に設けた条件だと言って良いだろう。

続く語りからは、これらの条件に照らしてパチプロについて何が言えるかに関する彼の説明の仕方に注目したい。まず彼は、パチプロは「誰にも幸せを与えてない」のだから「プロじゃない」と述べ、きっぱりと退けているのがわかる。これは先の2つ目の定義を受けてのものであるとわかるが、ここには独特の「熱っぽさ」を私は感じる。というのも、彼が言っているのは単なる間違いの指摘以上のものであり、それだけに相当パチプロを退けようとする意識を持っているように感じられるからである。

ところが、そういう構えで聞いていると、これに続く彼の言葉には軽い肩透かしをくらったような気分にさせられる。「パチプロって自分から言う人ってプロじゃないと思う」と彼は述べているが、これは、およそパチプロを批判的に捉える人の口から出る言葉ではないだろう。ここの部分で批判されているのはパチプロではなく、あくまでも「パチプロを自称している人たち」であり、当のパチプロについてはむしろ、(実力を)甘く見ないほしくらいの気持ちがこめられているように思える。つまり、この語りでは先ほどとは一転して、パチプロは彼の高い理想として語られているのである。

以上に見てきたように、バイクさんはパチプロに対して相反するイメージを持っていることがうかがえる。こうした卑しくも尊いパチプロのイメージ——誰のためにもなっていないという意味では軽蔑すべきものであり、気安く名乗るべきではないという意味では尊敬に値するものであること——は、どちらの意味にしても彼が自身をパチプロと名乗ることを遠ざけていると言える。このように理解してみると、バイクさんがなぜパチプロと名乗りたくないのかについて一応の答えにはなるだろう。しかし、正直この解釈ではまだ腑に落ちない感じがする。特に、この判断基準になっている「誰かに幸せを与えている人」というプロの条件は一体どこから出てきたものなの? この点について、彼がパチプロと勝率アップアドバイザーとを対比させていすることは極めて重要な気がする。そこで、さらに私は、他者への気遣い方を軸に、両者の対比をこのように考えてみた。

まず勝率アップアドバイザーの方だが、これは一種の対人支援という意味で看護理

論の「ケアリング」の考え方に対する意見を述べる。「ケアリング」には何人か提唱者がいるが、大雑把にくくると、援助を求める患者がいて、看護師がその患者を援助し、それによる相手の回復や感謝が自分の喜びや成長へと返ってくる、そういう相互関係のことである。これは程度によってはやや依存関係っぽくなってしまうこともあるものの、バイクさんが2つ目の定義で挙げている「誰かに幸せを与えていた人」にしっかりと応えることができると言える。一方、パチプロの実践には、私がこれまでの研究で示してきた「論理的配慮」を対置した<sup>6</sup>。これは相手の危害が少なくなるよう加減する配慮の一種であるが、あくまでも一方的なもので、相手には気づかれていなことも十分ありうるものである。その意味ではこちらは、相手に「幸せを与えていた」とまでは言えない。このように、両者の他者への配慮はかなり異なった性質を持っている。

また、両者の違いを示すものとして、バイクさんがパチプロからアドバイザーへの進路変更を全くいとわなかったことは注目に値すると思う。なぜなら、以前調査していた「論理的情感」を重視するパチプロは、バイクさんとは反対に、とにかくパチプロを長く続けることが大事だと繰り返し私に話したからである。今回のフォーラムに参加されていたパチプロのマコトさんも、YouTube動画『ガチプロ同窓会』で同じような発言をしている。

俺はほんまに好きやねん。だから今もやってんの。だけどこの人らはベクトルがちょっと違うと思う。丈幻も借金があったから。とよまるも借金があったから。だからそうやって（プロを）やる人はいんねんけど、やめてくれもそういう人が圧倒的に多いかな。<sup>7</sup>

マコトさんがここで話しているように、プロの中にはお金が稼げることを理由にプロになり、そして稼ぎが減ったために辞めていく、いわゆるにわかプロのような人も多いという。にわかプロと継続を旨とするプロ。フォーラムでは、「「ケアリング」一方向転換するプロ」と「「論理的情感」一継続するプロ」の対比を図にしてスライドで提示した。ここには、人間の性質として、自分の世界を居心地の良い方へ変容させていこうとする人と、「石の上にも三年」と言わんばかりにそこにじっと留まり続けるとの大きな思考の対立があるように思える。この両者の相容れなさと、バイクさんのこの時のアドバイザー志向の強さが、パチプロとは名乗りたくない根本的な理由の一つであったと考えることはできないだろうか。

<sup>6</sup> 松崎かさね（2022）「「勝ちやあいいってわけじゃない」——パチプロAの「期待値を積み上げる」プレーの論理」『文化人類学』87(3) 387-406.

<sup>7</sup> 「【後半】ラストで深い話になった…『ガチプロ同窓会』」  
<https://www.youtube.com/watch?v=0EbUjRk0kmw&t=2490s>

### 3 バイクさんが教えてくれたこと

フォーラムでは十分取り上げることができなかったが、発表する前に、私はバイクさん本人に上記のスライドを何度か見てもらっていた。その時の彼のリアクションはとても興味深いものであったため、ぜひ以下に紹介しておきたい。

まず印象深かったのは、最初にスライドの図（「ケアリング」と「論理的情感」を対比させた図）を見るなり、「ああ、これは合ってますね」と彼が話したことであった。私としてはこの対比はかなり自分の関心に寄せたものになったと思っていたこともあり、彼にすんなりと伝わったことが意外だったのである。その後彼は、「ケアリング」の方を指さして、自分はこっちであると迷いなく話した。そしてさらに、「論理的情感」の方へと指をさし向けると、「昔はこっちだった」「今は7：3ぐらいですかね」とも話したのである。パチプロ一本で過ごしていた頃はバイクさんも「論理的情感」のタイプであったこと、そしてこの2つの相容れないものが彼の中では濃淡のような形（「ケアリング」が7、「論理的情感」が3のこと）で共存していたことは、私にとって驚きであった。

しかしこの驚きは、次のバイクさんの言葉で納得に変わった。「たぶん、自分の父親が板前だったからだと思うんですよね。」そうだ、バイクさんの父親は、元ラガーマンの板前だったのだ。板前というのはその道を極めるプロであると同時に、作った料理を食する人たちに幸せを与える仕事でもある。バイクさんが先に提示したプロの2つの定義は、その両者を兼ね備えていた彼の父親の姿が原型となっているようだった。そう思うと、厳しい父親の育て方に反発した時期もあったであろうバイクさんの内面的な成熟に、私は感銘を受けずにはいられなかった。彼のYouTube動画では「パチプロと呼ばないでください」といった発言もみられていたが、それは上記の話と合わせて理解した方がより彼の真意に近づけるように思う。

それからバイクさんは、次のように話してくださった。プロとして「ほんとうにやりたいこと」をやるには稼ぎをあきらめなければならない部分が出てくること、けれども今家庭を持って子どもを育てなければならぬ状況では、やはり実益も重視しなければならないこと。加えて彼は、アドバイザーとしての稼ぎが安定すれば、またパチプロらしくプレーすることもできるかもしれない、と話した。彼は、少なくとも今は、実益を重視することに集中しなければならない時期なのだろう。人は誰しも、理想よりも実益を取らなければならぬ瞬間はあるものである。そういう状況にあるときは、むしろしっかりと自身の生活を満たすことが、彼の言うように、結果的にやりたいことに注力することにつながっていくのかもしれない。

また同時に、アドバイザーとしての軸にあるのはやはり日々の「パチプロ稼働」であると彼は言う。店に行ってパチンコを打ち、稼ぐこと。その中で培ってきた経験の豊富さが、芯のある確かなものを人に伝えることにつながるし、毎日稼働をしているからこそ、最新の情報を提供することも可能となる。彼を「アドバイザー・バイク修次郎」たらしめるのは、現役パチプロに劣らず日々稼働を積み、プロとしての実力を鍛錬し続けていることにこそあるのである。

### III おわりに

本稿は、パチプロ兼ライターのバイク修次郎氏を事例に、彼の「パチプロ嫌い」について考えてみた。話をよく聞いてわかったことだが、彼は確かにパチプロを批判し、アドバイザーを志向していたものの、同時にプロとしてその道を極めることにも強い思い入れを持った人であった。その思考の構造の整理はまだ不十分ではあるが、そういう彼において、パチプロとアドバイザーの両者が、相容れず対立するものでありながら、互いに支え合う関係にあるものとしても理解されていたのが印象的であった。

上記のことばは、翻って看護という実学と、人文科学という異質なものの並存を考えうえでも参考になるように思う。少なくとも私自身がこれまで、人文科学の不在に対する危機感から、これを実学の中に無理に入れこもうとしたり、あるいは分断されがちな両者をさらに切り離してしまい、逆に対立を強めることになってしまっていなかつたかと、振り返らずにはいられないである。

(まつざき・かさね)